

# 大学経営者が語るこれからの徳島

国立大学法人徳島大学  
学長

+ 河村 保彦

学校法人村崎学園  
徳島文理大学 理事長

+ 村崎 文彦

学校法人四国大学  
理事長

× 佐藤 一郎

公益財団法人徳島経済研究所  
専務理事

× 里 正彦

**里**：この度はお集まりいただきありがとうございます。今号の「徳島経済」では、前号に続き「人口減少」をテーマにしています。

徳島県の人口減少は少子化に加え、若者の県外流出が主な要因として挙げられます。大学や、短大、専門学校を含む高等教育機関への進学率は8割を超え、進学は若者が地域を離れる

大きなきっかけとなっています。

徳島県は、大学進学時の地元残留率が36.5%と四国で1位、全国でも18位と高い水準です。本日は大学を経営するお立場で、地元進学の選択肢を守り続けてこられた皆さまと、様々な観点から議論を交わせればと思っております。

**河村・佐藤・村崎**：よろしくお願いたします。



左から、里、佐藤理事長、河村学長、村崎理事長



## 学生の受入状況と卒業後の進路

**里：**まずは、現在の学生の受入状況と進路についてご説明いただけますか。

**河村：**徳島大学では例年、県内出身の入学者数が全体の約3割を占めます。中でも2024年度は入学者のうち県内出身者数が402名、全体に占める割合が30.5%と、過去5年間で一番低い水準となりました。

男女別にみますと、男子の県内出身者比率は24.6%であるのに対し、女子は38.5%と割合が高くなっています。こちらは過去5年間、同じ水準を維持しています。

**里：**徳島大学さんは、兵庫からの進学者が多いとお伺いしました。

**河村：**兵庫、大阪、和歌山、岡山などからの進学者が多いです。最近は東海地方出身の進学者も多く、広報活動時にもそうした地域へ足を伸ばすようになりました。

**里：**進路状況はいかがでしょう。

**河村：**就職を希望する学部生の就職率は99.2%と、高い水準を維持しています。そのうち県内就職者は186名で、就職者全体に占める割合は26.4%です。

例年、県内に就職する学生の割合は3割前後で推移しています。最近では県外の企業が基本給を大幅に上げたり、福利厚生面の強みをアピールされたりと、条件面が非常に良くなっています。その流れを受けて、県外志向の学生が増えているように感じています。

**佐藤：**四国大学では、在籍者数の約7割にあたる1,928名が県内出身です。徳島大学さんと反転する形で、県内からの進学者が圧倒的に多くなっています。男女別にみますと、男子が36%、女子が64%と、女子の方が多い状態です。また、外国人留学生は135名で全体の5%を占めています。

昨年の就職率は97.7%と、全国平均の90.4%を大きく上回っています。そのうち約6割の380名が県内で就職しています。業種別の就職率は、医療・福祉が29.8%、教育・学習支援が15.4%、卸売・小売が14.8%となっています。

**里：**県内就職者の人数がとても多いように思います。要因などはございますか。

**佐藤：**県内出身学生の比率が高いことは勿論ですが、本学では、地元自治体・企業・住民と連携し地域を志向した教育を全学的に進めています。地域のことをよく知り、学生として地域で活動する経験を積み、卒業後も地域でたくましく



国立大学法人徳島大学 学長 河村 保彦氏

1978年3月信州大学理学部化学科卒業、1983年3月東北大学大学院理学研究科博士課程後期修了。1985年10月より徳島大学工学部で助手、講師、助教授、教授、理工学部長などを経て、2020年4月徳島大学理事・副学長、2022年4月徳島大学学長に就任。



学校法人四国大学 理事長 佐藤 一郎氏

1968年3月東京工業大学工学部経営工学科卒業、1970年9月東京工業大学大学院理工学研究科修士課程修了。1976年4月より四国大学で講師、教授などを経て、2002年4月、四国大学理事長に就任。

く活動する地域貢献型人材の育成を行っていることが大きな要因であると考えています。

**村崎**：徳島文理大学は、徳島と香川にキャンパスがございます。全体の在籍者の内、徳島出身は36.4%、香川出身が20.2%と、本学の地元(徳島と香川)出身者の割合が半数以上を占めています。

そこに愛媛、高知を加えますと、四国出身者が約8割を占めます。また、沖縄、兵庫、岡山出身の学生も以前から多いです。

**里**：徳島文理大学さんは、沖縄県外の大学で沖縄出身の学生数が日本一だとお伺いしました。

**村崎**：先々代(村崎<sup>ただひと</sup>凡人氏)は戦争経験者で、太平洋戦争時に「沖縄が日本を守った」という考えを持っておりました。当時の沖縄県は、本土との教育格差があり、「沖縄の教育を何とかしたい」という思いから、沖縄からの学生(戦後すぐは「留学生」と称されていた)を積極的に受入れていたようです。自身の家の近くに寮を建てるなど、熱心に支援していました。その結果、口コミで入学生が増え、現在に至ります。

**里**：学生の進路状況はいかがですか。

**村崎**：昨年の大学・短大全体の就職率は98.7%で、徳島出身者の67.6%、香川出身者の70.2%が地元で就職されています。

「県外流出を止める」ことに関しては少し違う視点で考えていて、私たちは県外の入学希望者に地元へのUターン率の本学の状況をお伝えし



専務理事 里 正彦



学校法人村崎学園 徳島文理大学 理事長 村崎 文彦氏

徳島文理大学附属幼稚園、徳島文理小学校、徳島文理中学校、徳島文理高校卒業。2004年3月東京大学教育学部総合教育科学科教育学コース卒業、2007年3月同コース大学院修了。2011年1月ポストン大学大学院修士課程修了後、徳島文理大学にて勤務。講師、准教授、教授、理事長室長などを経て、2024年3月学校法人村崎学園理事長、同年4月学校法人村崎学園学園長に就任。

ています。例えば沖縄出身の学生の60%、愛媛・高知・兵庫出身の学生も50%が地元で就職されています。こうしたUターン率の現状を保護者にもお伝えすることで、「資格を取るためなら、県外に進学してもいい」という判断をしていただけます。また進学者の多い県外の自治体と就職協定を結び、卒業後に帰りやすい環境を整えています。

人口減少や若年層の県外流出は徳島だけでなく、全国共通の問題です。「県外学生も地元へ戻りたい」という考えを踏まえなければ、学生募集は難しい状態にあるといえます。

**里**：徳島においても、「進学で県外に出ても、将来的には戻ってきたい」という学生は多いように思います。

**村崎**：将来的には地元で働きたい、と思っている県外の方々が、進学で徳島に移り住んでもらえていることは、徳島の活性化に繋がっていると考えています。

県外出身の学生が地元に戻ったとしても、徳島で過ごした時間は思い出として残ります。卒業後もふるさと納税や観光といった形で、徳島に関わり続けてくださる方も多くいらっしゃるようです。

**里：**人口減少対策としては、その地域に住む「定住人口」だけでなく、住んでいなくても定期的に地域と関わり、地域に貢献しようとする「関係人口」を増やすことも重要ですよ。

**村崎：**そうですね。四国大学さんも留学生を積極的に受入されていますが、国や都道府県を問わず、色んな文化がダイナミックに交流する環境が県内にあることは、徳島で学ぶ学生たちにとっても良いことだと考えています。

他県では、大学の設置によって地元学生の高等教育進学率が上がった事例もありますが、徳島の発展のためには、県内のみならず県外の方から選んでいただける大学であり続けたいと思っています。

**+** **×** **+** **×**

### 少子化時代の学生募集

**里：**高校生に向けた広報活動は、どのように行われているのでしょうか。

**河村：**徳島大学では、進学希望者全体に向けて、8月にオープンキャンパスを実施しています。一部の学部は説明の様子をYouTubeで生配信したり、8月以降も全学説明会をオンラインで複数回実施したりと、より多くの方に参加していただけるように工夫をしています。

**村崎：**本学もそうですが、最近ではオープンキャンパスの頻度も昔に比べて増えてきましたよね。

**佐藤：**そうですね。本学でも6～7回程行っています。高知や沖縄など、県外でも開催しています。

**河村：**文理大学さんも、沖縄でオープンキャンパスをされていらっしゃいましたね。

**村崎：**はい。出張オープンキャンパスを実施しています。全学科ではなく一部の学科対象にはなりますが、沖縄出身の現役学生に加えて卒業生の協力を得てキャンパスライフを紹介したり、進路相談や模擬授業を実施したりしています。

**河村：**県外でのオープンキャンパスなど、私学



四国大学のオープンキャンパスの様子



徳島文理大学の沖縄出張オープンキャンパスの様子

さんに比べますと国立大学はまだまだ頑張らなくてはいけないと感じます。

**里：**オープンキャンパスの他にも、学生に向けた広報活動の機会はあるのでしょうか。

**河村：**合同の進学説明会に参加する場合や、県内外の高校に直接お伺いして説明会を開く場合がございます。

**村崎：**県内では進路選択の授業の一環で、各大学の担当者と一緒に、進路ガイダンスを行うこともありますよね。

高校内ガイダンスは自校の説明をフルにしていい学校別進路説明会と、高校生の進路選択のサポートとなる分野別説明会があります。進路の選び方や就きたい職業に必要な資格の説明など、各大学に共通する部分を説明し、ガイダンスを担当した学校が自校を例にしながら説明を行う場合がございます。

**里：**3大学の皆さまが、一緒に説明会を行われる、ということもあるのでしょうか。

**佐藤：**教育関係の業者さんが主催する合同進学

説明会などでは一緒に参加し、大学ごとにブースを設置しています。ただ、競合関係でもあるため、各大学が共同で学生募集を行うことは難しいと感じています。

一方、外国人留学生に向けては、本学(四国大学)と徳島工業短期大学さんと連携し、学生の共同募集を実現しています。本学の職員が海外での説明会に参加した際に、学生から「自動車に興味がある」というお話があると、徳島工業短期大学さんのご紹介をしますし、その逆の場合もございます。

**里：**いつ頃から連携体制を取られているのでしょうか。

**佐藤：**7年ほど前になります。留学生の募集を始めたころ、徳島工業短期大学の前理事長である近藤孝造氏にご提案いただいたのが始まりでした。双方のキャンパスで国際化が進んだことは、連携体制の大きな成果だと考えております。

**里：**お互いのカリキュラムにない部分を補い合う形で、うまく連携していらっしゃるのですね。

+ × + ×

## 連携でつくる魅力的なカリキュラム

**里：**カリキュラム編成においても、大学間で連携されることはあるのでしょうか。

**河村：**はい。四国内の5つの国立大学(徳島、鳴門教育、香川、愛媛、高知)では、2023年の4月より、「連携教職課程」を開始しました。

それぞれの大学の強みを生かしながら、各大学の教員養成の科目を連携し、美術、家庭、情報など多様な専門領域をカバーしています。

**佐藤：**教職課程の全教員を自前で持たなくてもいいということですね。

**河村：**そうですね。今後、単独では維持が難しい教科も存続が可能となるうえ、連携することでより魅力的なカリキュラムを用意することができます。例えば美術分野では、四国5国立大学以外からもゲスト講師をお呼びし、四国にいても最先端の知識や技能を身に付けられるようになっていきます。こうした連携の取り組みは全国でも初めてで、少子化時代のモデルケースになればと考えています。

**里：**他にも、5大学の皆さまで連携されている取り組みはございますか。

**河村：**「四国人財育成塾」のプログラムがござ



四国5国立大学の連携スキーム図

います。各大学が学術講演会やシンポジウムを持ち回りで開催し、四国共通の課題を研究・討論する機会を設けることで、地域課題の解決に向けた人材育成に一丸となって取り組んでいます。こちらは学生だけでなく、社会人の方にも多く参加していただいています。

**村崎：**県内の大学さんは、本学(徳島文理大学)も含めて、それぞれが幅広いカリキュラムをお持ちですよね。学部学科の数で見れば、徳島の子どもたちは恵まれた環境にあると思っています。

人口減少により、芸術や音楽などの学部・学科を設置できない大学・地域も多くあります。県内で幅広い選択肢を維持することは、徳島の子どもたちが地元で夢を叶える可能性を残すだけでなく、選択肢が少ない他地域から学生を呼び込める可能性も高めます。

また、免許や資格を取れるカリキュラムも多く、就職を見据えた上での選択肢も取りやすくなっています。

**里：**県内残留率が四国1位となったのも、そう

したことが関係しているように思います。

**村崎：**そうですね。学生のニーズも多様化していますので、本学は学部学科や資格の数を充実させて、中には小さな学部もございいますが、学生の学びたいという意欲を重視し、学生数を確保するという考え方で運営を続けています。

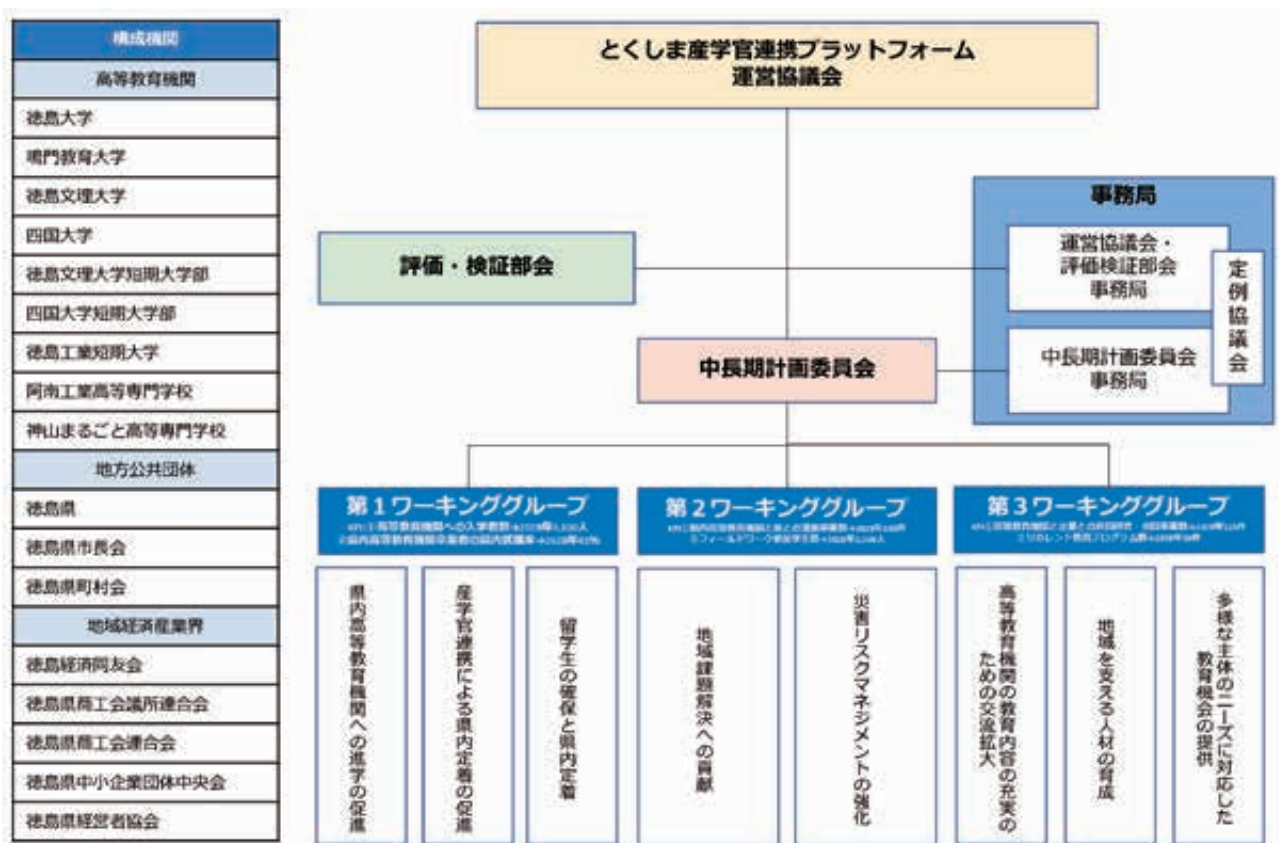
学科数が多くなるため、その分教職員を多く雇用しなければならず、大学としては苦勞するところではありますが、人口減少を抑えるという点でも、学びのニーズに応える点でも大事なことだと考えております。

**+** **×** **+** **×**

### 地域全体で、次世代を担う「人財」を育てる

**里：**3大学の皆さまで連携されている取り組みと言えば、産学官連携プラットフォームがございいますね。

**佐藤：**はい。2018年8月、地域社会の発展をめざして、県内すべての高等教育機関と経済5団体、徳島県、徳島県市長会および町村会の皆さまと包括連携協定を締結しました。



とくしま産学官連携プラットフォーム 組織図

高等教育機関においては、3大学のほか、鳴門教育大学、徳島工業短期大学、阿南高専さん、そして本年度からは神山まるごと高専さんにも加わっていただきました。

**里：**具体的にはどのような取り組みをされているのでしょうか。

**佐藤：**学生確保と県内就職の促進という点では、共同YouTubeチャンネルでの情報発信や、実践型インターンシップの実施、共同授業『徳島の魅力、徳島で働く』の開講などの取り組みを行っています。

地域産業の活性化や時代を担う人材育成という点では、各高等教育機関や市町村などとの共同研究・共同事業や、地域課題解決を目的とするフィールドワークの実施、社会人を対象としたリカレントプログラムの提供などに取り組んでいます。

**里：**各団体の垣根を越え、一丸となって取り組まれているんですね。

**佐藤：**はい。ただ、この事業は私立大学等改革総合支援事業の枠組みを使って進めています。

そのため、徳島大学さんは私たちと同じように取り組んでいただいているにも関わらず、補助金を得ることができないのです。

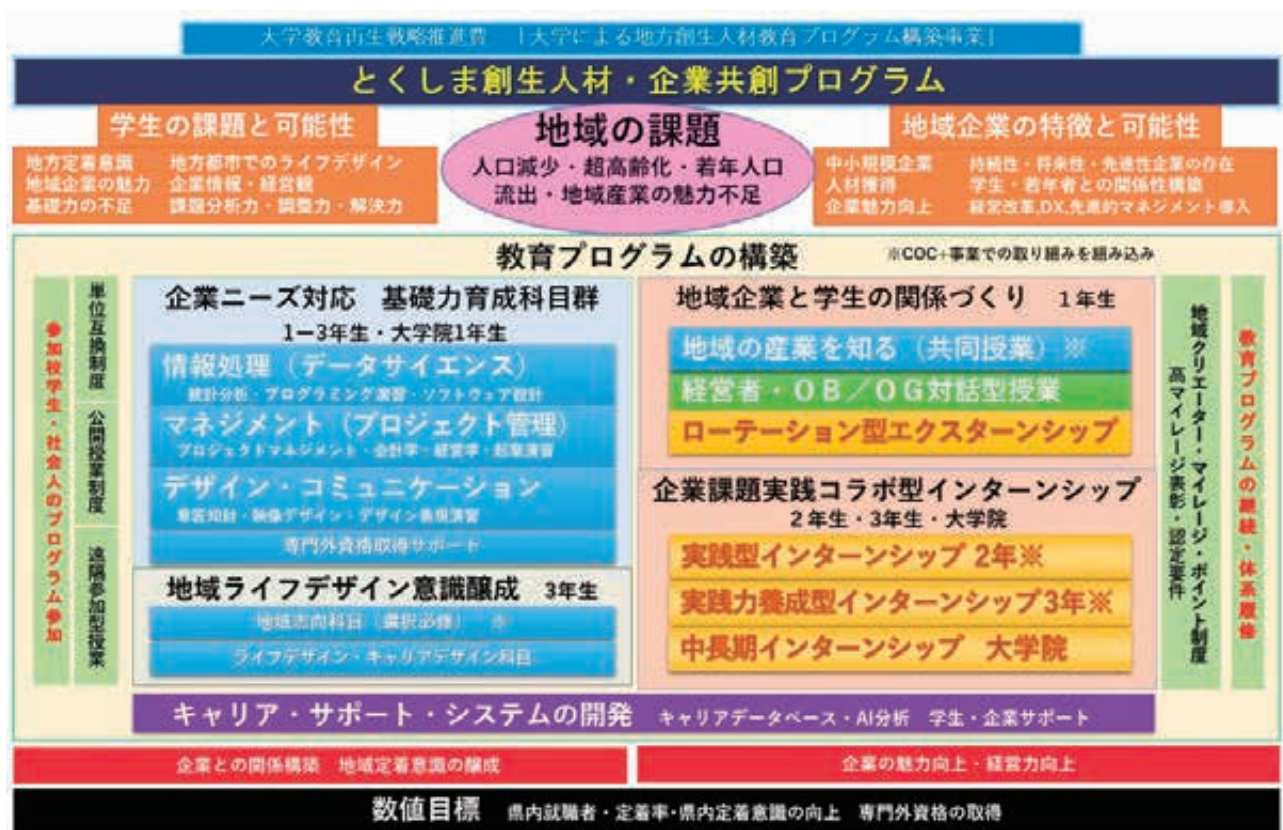
その分、徳島大学さんが主幹とされているCOC+R事業などにも、しっかりと協力させていただきたいと考えています。

**里：**COC+R事業についても、詳しくお伺いしたいです。

**河村：**COC+R事業「とくしま創生人材・企業共創プログラム」は、地域の未来を担う人材を大学と企業が共に育成する取り組みです。

企業の皆さまと関わることで、「地元の魅力を学生が再発見し、県内に定着する」といった好循環を生み出すことが目的となっています。また、その過程で企業の皆さまに成長していただくことも目標に掲げています。

同事業は、2015年度に徳島県や県内の高等教育機関(四国大、四国大短期大学部、徳島文理大、徳島工業短期大、阿南高専)と共に始めた「COC+」事業が前身となっています。2020年度に、「企業共創」をテーマに加え、「COC+



COC+R事業 スキーム図



地域クリエイター表彰式



COC + R 事業参加校共同授業  
「徳島の魅力、徳島で働く」

R」事業として改めて文部科学省から採択いただき、新たにスタートしました。

全国でも同事業の採択を受けた地域は4つしかございません。また、これだけ多くの教育機関が参加しているのは徳島だけであり、非常にありがたく感じております。

**里：**徳島県独自の取り組みとして、どのような特徴があるのでしょうか。

**河村：**地域学習や実習科目を設置したほか、企業の皆さまと連携し、実践型のインターンシップや短期訪問実習(エクスターンシップ)を実施しています。また、積極的に取り組んだ学生には、「地域クリエイターズ・マイレージ・ポイント」を付与し、就職活動時の自己PRにも活かせるよう履修証明書も発行しています。特に高ポイントを取得した学生は、徳島県知事などから表彰を受けられる「地域クリエイター表彰」制度があるのも特徴のひとつです。

また、地域課題に沿ってコーディネーターも

起用しています。単に地元就職を促進するだけでなく、地元や企業の方の課題解決にも繋げていただける内容となっています。

**里：**各高等教育機関さんとは、どのように連携されているのでしょうか。

**河村：**共同授業を実施し、遠隔履修や単位互換

制度も導入したことで、大学の垣根を越えてより多くの学生が参加できるようにしています。

本学単独では難しい取り組みですが、ご協力いただくことで、地域にとって魅力的なカリキュラムを実現することができています。

**里：**COC + R 事業の今後については、どのようにお考えですか。

**河村：**四国大学さん、徳島文理大学さんには、「COC +」であった時代から多大なご協力をいただいております。地元で就職される学生さんも多く輩出されており、こうした動きを加速させるためにも、COC + R 事業を現状に合わせてバージョンアップしていきたいです。

また、リクルーティングやキャリア支援、AIなどのデータサイエンス教育といった共通の課題も多くあります。これらの課題を乗り越えるため、COC + R や共同研究拠点などの仕組みを上手く活用していただき、ウィンウィンの関係を築いていければと考えています。

**里：**「COC + R」の他にも、地元企業の皆さまと共同で実施するカリキュラムはございますか。

**佐藤：**はい。四国大学の経営情報学部では、2010年から中小企業家同友会の経営者の皆さまと連携して、「社長塾」を開講しています。

経営者ご自身のお言葉で、経営理念や会社が有する技術の特徴などについて、学生にお話しいただいています。専門的な勉強をする傍ら、企業経営の考え方も学べることで、卒業後の進路を広げる良い機会となっています。





社長塾の講義風景

**里：**「社長塾」に参加された学生は、どのような感想をお持ちですか。

**佐藤：**講師となる経営者の方々は、会社経営に対するご自身の考えを、普段は見えづらい部分までお話してくださいませ。そうした話になればなるほど、学生は非常に興味を持ち、感銘を受けております。「社長塾」は本学だけでなく、徳島文理大学さんも開講していらっしゃいます。

**村崎：**徳島文理大学でも総合政策学部において、中小企業家同友会のご協力を得て、2018年から社長塾を実施いたしました。それに加えて、現在では「社会課題解決をテコに新たな価値を創造するための理論と実践を学ぶ」を目的に「集客交流産業論」を2015年より開講しております。毎年度テーマに沿った講師をお呼びして、最前線の現場について学んでおります。

他にも、県内の魅力や地域の課題について知っていただくために、新入生の必須科目として「文理学(地域学)」を設けています。本年度



地域学スタートアップコースの様子(万代中央ふ頭にて)

は、「地域学スタートアップコース」として、課外学習の機会を設け、倉庫街を活用し「新しいまちづくり」を進める万代中央ふ頭の皆さまからお話をお伺いしました。

こうした取り組みは、県内出身者だけでなく、県外から来られた方にも徳島に愛着を持っていただける良い機会になっています。

＋ × ＋ ×

### 地元就職を選択肢に入れてもらうには

**里：**地元定着のための取り組みを通じて、感じている課題や思いなどはございますか。

**村崎：**人口減少が深刻さを増す中で、地元の利益が優先され、「地元に残る」という選択肢が強制されたり、学校側の評価を高めるために誘導したりすることは望ましくないと考えています。

本学園には高等学校もあり、県外に進学する生徒も多くいます。同様に大学生たちが「地元以外の大手企業や給与水準の高い企業に行くことで、生活が豊かになる」と感じているならば、その夢を大学側が止めることは難しいです。学生たちが「残りたい」と思えるような地域かどうか、という視点が重要なのだと思います。

また、大学進学を希望する高校生のなかには、「大学選び」と同じくらい「まち選び」を重要視している方もいます。徳島・香川を住む場所として選んでもらうための魅力づくりを、大学単体で行うには限界があると感じています。

**里：**学生たちに選ばれる地域になっていかなければ、という視点は本当にその通りですね。

一方で、徳島には世界に誇れるような企業もたくさんあるのですが、学生がそうした選択肢があることを知らないという現状もあるように思います。

愛媛で高校生に「事業内容まで知っている地元企業の数」を尋ねたところ、約7割の生徒が「ゼロ」「1～4社」と回答したようです。名前が挙がったほとんどの企業は、私たちでも知っている大手企業で、県外資本の名前もありまし



た。愛媛同様、徳島でも高校生が地元企業の良さを知らないまま県外に進学しているとすれば、就職活動において地元企業が選択肢に挙がる可能性は低くなります。

**佐藤**：地元企業を知らないというのは、高校生だけでなく大学生でも同じですね。県内で世界トップシェアを有する企業や、県内の売上ランキング上位に入っている企業の存在を知らない学生は多いです。

社長塾を受講した学生向けのアンケートでも、「県内にこんな素晴らしい企業があることを知らなかった」という意見がたくさん見受けられました。

**村崎**：保護者の方も同様かもしれません。特にBtoBの企業は、あまりご存じでない方も多いです。

就職実績は学生募集にも大きく影響するため、選んでいただくために上場企業のお名前や、公務員試験の合格者数を先に紹介せざるを得ないという実情もございます。保護者に向けても、地元企業の良さをもっと知ってもらえるような機会があっても良いのかもしれませんね。

**河村**：BtoBの企業で、例えば四国化工機さんは最先端の充てん・包装機器や、食品事業など、非常に幅広く事業をなさっていますよね。「世界に誇れるような事業や働く場所は徳島にもあるんだ」ということを、高校生やその保護者に知っていただく機会をもっとあってもいいと思います。

かつて「13歳のハローワーク」という本がベストセラーになりましたが、四国や徳島版で早くからキャリアを学べる媒

体があればと思います。また、「プロジェクトX」のように、大人の方にも興味を持っていただける発信の方法を考えるのも、良いのではないかと思います。

**里**：私自身は、地元企業を良く知る民間人材が、高校や中学校などのキャリア教育に関わり、それぞれの企業が持つ魅力を伝える仕組みがあってもいいのでは、と考えています。

**佐藤**：それはいいアイデアですね。県内企業の魅力を知らない学生は、結果として「都会は給与が良い」「都会に憧れがある」といった基準でしか就職先を選ぶことができません。同じ業種でも、都市部と地方では給与が10数万円違う場合もあります。

また、近年は外国人雇用のニーズも高まっていますが、自分で生活費や学費を賄っている留学生ほど「給与」の違いには非常にシビアです。こうした視点も忘れてはならないと思います。

**河村**：本学で実施した留学生の意識調査でも、同じような傾向が見られています。

**佐藤**：在学中のアルバイト先選びでも、最低賃金や時給の違いには敏感です。時給が少しでも高ければ、自転車で片道20分ほどかかってもアルバイト先を変える、という方も多いです。

一方で、地方の企業が全て都市部と同じ給料水準にできるかといえば、難しいところもある



と思います。そこは、経営者の理念やビジョンを説明し、その企業にしかない魅力を感じてもらうことが重要かもしれません。

**里：**先ほどお話いただいた社長塾や、COC + R事業の取り組みも、そうしたお考えが基にあるのでしょうか。

**佐藤：**今日のお話では「県外流出を止められない」という声もありましたが、都市部よりも魅力のある企業が徳島でたくさん育ち、学生がそのことを知れば、徳島に留まってくれるのではないかと希望を持っています。

東京一極集中によって人口減少が加速する中で、私立大学や国公立大学も含めて、四国に一つしか大学がいないという時代が訪れるかもしれません。そうした状況の中でも、「地域で学び、資格を取って就職をしたい」という学生に選んでもらえるカリキュラムを用意し、地元で活躍できる人材を育成し続けたいと考えています。

**村崎：**人口減少に伴い人材不足が加速し、省人化も進んでいます。徳島でもセルフレジや配膳ロボットを見かける機会が増えてきました。

この先、地方でも人手が不要な生活が変わっていくとすれば、子どもたちが就職してからの40年間、将来を見通せる仕事を地元で提供できるかという観点も重要だと思います。

そうした企業や仕事が、大学のベンチャーや産学官連携の取り組みの中から生まれてくれば、本当に嬉しいことですよね。

+

×

+

×

### 徳島にしかない魅力をつくる

**里：**先ほど大学ベンチャーの話も出ましたが、地元で新たな可能性を生み出す人材を育成し、魅力的なビジネスの創出に繋げるという取り組みは、まさに今、皆さまが挑戦されているところだと思います。

徳島大学さんは、多くのベンチャー企業を輩出されていますよね。

**河村：**現在、大学発ベンチャーは36企業にま

で増えております。代表的な企業としては、ゲノム編集技術を活かした商品開発を行う「株式会社セツロテック」や、先端レーザー・プラズマ技術で産業界の革新をめざす「株式会社Smart Laser & Plasma Systems (以下、SL & PS社)」、食用昆虫の養殖ビジネスを展開する「株式会社グリラス」などがございます。

セツロテックとSL & PS社は、2024年の3月に、四国経済産業局が選定する「J-Startup WEST(四国地域)」に選定していただきました。



J-StartupWEST (四国地域)選定式

四国地域から全国・世界に羽ばたく企業として選ばれた11社のうち、2社が本学発のベンチャー企業であったということは、大変喜ばしいことだと感じています。

**里：**徳島文理大学さんも、地域課題を解決に導くための新たなビジネスを生み出そうとしていらっしゃいますね。

**村崎：**はい。徳島や香川では海藻養殖が盛んですが、温暖化などの影響でその水揚げ量は減少し、色褪せも発生するようになりました。こうした課題を、大学の知見や技術を活かして解決するために「あおさのりプロジェクト」を進めています。

その結果、2021年11月に薬学部の山本教授によって、世界で初めてあおさのりの陸上養殖を実用化することに成功しました。2022年には、海陽町のベンチャー企業である「海藻ラボ」と連携し商品化も実現しました。山本教授はこの技術を世界的に広めていくために特許を取得し



なかったそうです。その思いに応えるように徳島大学さんでは、鉄分を多く含む「ミリンソウ」の陸上養殖に成功されており、季節を変えながら同じ施設で養殖しています。

また山本教授の協力のもと、あおさの陸上養殖設備を愛媛県西予市に設けたマルコメ(本拠地:長野市)さんが、この9月から味噌汁の具材としてこれまでのものから「陸上養殖あおさ」に一新するようです。

**里:** そうした取り組みは、学生にどのような影響を与えていらっしゃいますか。

**村崎:** 薬学部の学生にとっては、薬剤師だけでなく、化学や生物学のスペシャリストとして製薬や食品会社など幅広い進路に繋がることを実感していただくきっかけになっています。

また、他学部ではありますが、短期大学部生活科学科パティシエコースの学生があおさのりを使った「あおサブレ」の開発を行い、今年の3月から販売を開始しました。製造をスタジオれもんさんに委託し、クレメントビルさんや徳島県庁さんの売店で販売していただいています。



あおさのり 陸上養殖場



「あおサブレ」完成記者会見

産官学が連携する形で商品化できたことは、学生にとっても良い経験になったと考えています。

大学の研究は内部に閉じられがちですが、目に見える形で成果を地域・社会に還元し、そうしたことに魅力を感じる生徒に本学を選んでもらえれば嬉しく思います。

**里:** 四国大学さんでも、地域資源を活用した取り組みを進めていらっしゃいますね。

**佐藤:** はい。本学では、徳島の二つの「青」である藍とLEDを中心に、「SUBARU事業(四国大学研究ブランディング事業)」と、「T-LAP(徳島光・アート教育人材育成事業)」の活動・研究を進めています。

この2つの事業では、地域資源の新たな可能性を見つけ、活用できる人材を育成することで、新規ビジネスへの展開や地域関連企業の活性化に繋げることを目的としています。



SUBARU事業、T-LAP事業の概要



LED植物工場での藍栽培

取り組みの結果、食用藍の機能性の発見および機能性表示食品開発への展開や、光アートを活用した徳島のイメージ向上などの成果が生まれています。また、LEDを用いた藍の水耕栽培など、2つの地域資源の価値を掛け合わせることで、お互いの価値を高める研究も行っています。

**里：**そうした取り組みは、徳島自体の価値も高めてくださっているように思います。

**佐藤：**そうですね。徳島の価値を高めたいという思いはずっとあります。

昔のことですが、心にずっと残っている出来事があります。金沢の大学を見学した時のことです。その大学の理事長が、「徳島県にはお世話になっています」と開口一番におっしゃいました。理由を尋ねると、金沢の名産菓子に徳島産の和三盆を使っており、その菓子が好評で徳島に感謝しているとのことでした。私はそのお話を伺い、とても悔しく感じたのです。

徳島は第一次産業が盛んですが、他地域が徳島の産品を使って高付加価値を付けている一方で、徳島自身は地域資源の活用や産業育成がまだ弱いように思います。藍産業で栄えた時代から現在まで、徳島が衰退している要因の一つがここにあると考えました。

こうした思いは今もあり、本学も地域課題の解決や、地域資源の活用に繋がる新たなビジネスを育てていく努力を続けていきたいと考えています。

**里：**そういう視点で見ますと、大塚製薬さんや日亜化学工業さんは、上手く地域資源を活用されて大きくなられていますね。

大塚製薬さんは製塩で栄えた鳴門で、塩田残渣(にがり)を活用して炭酸マグネシウムなどを、日亜化学工業さんは徳島で産出された石灰石を活用し、結核の治療薬の原料となる無水塩化カルシウムなどを作るところから、事業を興されています。ぜひ、その次の企業がでてきてほしいという思いもありますよね。

**佐藤：**はい。そのため、本学では創業支援事業



チャレンジショップの様子



学生開発プロジェクトの様子

の取り組みを続けています。まず学生が創業に興味を持てるよう、行政の担当者や地域の企業家の皆さまを招待し、講演やグループワーク、ビジネスセミナーなどを開催して、地域の課題や企業、創業の選択肢を知ってもらうところから始めています。

次に、起業に関心を持った学生に向けては、ビジネスプランの作成、仕入、販売、運営管理といった創業のプロセスを学べる「チャレンジショップ」や、県内企業と連携して商品開発を実際に体験する「学生開発プロジェクト」なども実施しています。

**河村：**新たな産業を興していくというのは、本当に難しいところです。文部科学省は「総合知」や「集合知」という言葉をよく使われますが、いまの学術界にもそうした考えが求められているのだと思います。

専門領域を極めることも重要ですが、先ほど

お話いただいた社長塾のように、色んな人と出会って見分を広めることが、今の学生には必要なのだと思います。

こうした考えから、本学(徳島大学)では内部でも研究分野の垣根を取り払い、異分野融合研究を推進し、新たなアイデアに繋げるための「研究クラスター制度」を実施しています。分野横断的な場を作ることで研究テーマが広がるだけでなく、全く違う分野の研究者が持っている機器を融合研究で他分野の研究者が使用することで、今まで予想もしなかったような成果が生み出されています。

**佐藤**：何か物理的な交流スペースも持ってらっしゃるのでしょうか。

**河村**：講義棟上階のエレベーターホール横の空間を活用し、お茶を飲みながらディスカッションできるスペースを用意しています。今後、工学部創立100周年の記念に日亜化学工業株式会社さまからいただいたご寄附を活用し、「イノベーションコモンズ」という建物も準備する予定です。完成後は、就職説明会などでも活用していきたいと考えています。



イノベーションコモンズのイメージ  
(注)コンペティションで選定されたアドバイザーによる提案イメージであり、実際の整備案ではない

**佐藤**：やはり世間話から画期的なアイデアが出てくる、ということはあるですね。ぜひ参考にさせていただきたいです。

**村崎**：今の学生は授業や実験実習・就活に追われ、「自分探し」をする時間や余裕がないようにも見えます。また、真面目で素直な子が非常に多いとも感じます。周りから「出口(卒業後の仕

事)はここだ」と勧められ、その道を辿ることを望まれている学生も多いのではないのでしょうか。

近年、新学科を設置する際に文部科学省から「卒業後の社会のニーズ」すなわち「就職先があるかどうか」の調査結果を求められます。文部科学省も少子化でむやみに学部学科を増やせないという思いがあるのだと思います。ただ、ある意味では、既定路線を作り子どもたちの将来を狭めているようにも感じます。

「〇〇学科を卒業したならば△△に就職すべき」「一度仕事を決めたら、定年まで働くべき」といった思考ではなく、もうすこし社会が若者に寛容でなければいけないのでは?とも考えてしまいます。他者への関心度が低いとも言えますが、寛容さ、自由度が高そうに「見える」都会は、若者にとって魅力的なのかもしれません。



### 今後に向けた新たな取り組み

**里**：そうした状況でも、皆さまは学生や地域のニーズに応えられる学部学科を創設され続けていらっしゃるように思います。今後の展望などはございますか。

**佐藤**：2025年は、学園創立100周年という節目の年になります。

100周年を迎えるにあたり、現在設置構想中ですが、2026

年4月に「デジタル創生学部デジタル創生学科(仮称)」という新たな学部の設置を計画しており、地域の中で新たな役割を担える人材の育成にチャレンジしたいと思っています。

新しい学部では、徳島県の若年層の県外流出とデジタル人材不足に対応するため、情報科学と経済的思考を併せ持ち、地域の課題解決や地域活性化に貢献できる「実践的デジタル人材」の育成・輩出をめざしております。このほか、



つむぐ、つながる、はばたく  
SHIKOKU UNIVERSITY  
1925 ▶ 2025 100th Anniversary

創立100周年記念ロゴ



新学部設置構想に関する記者会見の様子

普通科の文系・理系や専門学科の多様な分野からも入学後共に学べる「文理融合の実践型教育」とすることや、創立時に掲げた「女性の自立」を背景に女子学生にとっても魅力的な学びの場とすることなども新学部の特徴となるよう検討していきたいと思っています。

**村崎：**徳島文理大学では、2025年に学園創立130周年を迎えるにあたり、高松駅横に現在の香川キャンパス(さぬき市志度)を全面移転いたします。



移転に伴い、高松駅キャンパスには新学科として総合政策学部経営学科を新設いたします。地元・香川の高校生から「経営学を学びたい」「家業を継ぎたいが学びの必要性を感じる」といった声を以前から伺っていました。そのため県外へ進学したケースもあったようです。

そのようなニーズに応えるため、「まちから学び、まちへ還元する学び」としてPBL (Project Based Learning)を中心に、いまの経営学、すなわち経済学・会計学・データサイエンスも加えた学びを実施いたします。

また、多様化する学生のニーズに応えるため、既存の学部学科の強みも生かし、学生たちが横断的に学べる場を作りたいです。例えば、薬剤師であってもデータサイエンスや経

営を学べたり、看護師であっても音楽療法の学べたりと、総合大学の強みを活かすことで、学生から選んでいただける大学であり続けたいと思っています。



新設中の高松駅キャンパス(外観イメージ)



高松駅キャンパス内の大講義室兼音楽ホール



**河村：**徳島大学では、2023年度より理工学部理工学科に「医光/医工融合プログラム」を新設いたしました。

学生定員は30名ですが、1年生から医学部の先生の指導を受けることができ、研究室にも配属されます。「メディカル」というキーワードは学生にとってもインパクトが強いようで、他の理工系コースに比べて女子学生が2～3割程多くなっております。

昨今、人口減少や高齢化が加速しており、「遠隔医療」の実現が急務とされています。本学の強みである「光工学分野」と「総合医科学分野」を融合させることで、光工学と医学双方の知見と技術に精通し、研究から新ビジネスの創出まで幅広い分野で活躍できる人材の育成をめ

ざしています。徳島でも高齢化が進む中、創造的に社会課題を解決し、地域の活性化に貢献できればと考えております。



医光/医工融合プログラム 研究風景

**里**：昨年度には、文部科学省から定員増加が認められたとお伺いしました。全国の地方国立大学のうち、認可が下りたのはわずか3件だけだったとのことですね。

**河村**：はい。徳島全体をみますと人口減少や県外流出が進むにつれ、「光工学分野」の人材不足が課題となっております。そうした状況に対応する形で、「令和6年度大学・高専機能強化支援事業(高度情報専門人材の確保に向けた機能強化に係る支援)」に申請し、大学院創成科学研究科(博士前期課程)理工学専攻に「先端融合情報学プログラム(仮称)」(入学定員40名)を新設することを計画しています(2024年6月26日付で選定)。都市部と地方との情報技術導入における格差を解消するため、専門知識と情報科学の双方に通じ、地域課題を解決できる高度情報専門人材を養成していきたいと考えております。

その他にも、研究者の早期育成のため、博士号取得後に実務実習や国家試験を経て薬剤師資格の取得が可能となる「Ph.D.-Pharmacistプログラム~こころざし(KOKOROZASHI)プログラム~」や、2023年4月には大学院医科栄養学研究科に「宇宙栄養学コース」を開設するなど、

様々な取り組みを進めています。

**里**：先ほど、工学部創立100周年のお話もございましたが、本年度には総合科学部も創立150周年を迎えられますよね。

**河村**：総合科学部の歴史は、1874年(明治7年)の徳島師範期成学校の創設に遡ります。1949年の学制改革により徳島大学学芸学部となり、1966年に教育学部に改称、1986年に現在の総合科学部が設置されました。



総合科学部  
創立150周年記念ロゴ



創立150周年記念展

創立以来、3万人あまりの卒業生を世に送り出し、地域社会を支える優れた人材を輩出してきましたが、このたびの創立150周年記念事業では、その歴史を振り返るとともに、学生の教育環境を整え、地域の皆様との絆をより深める機会とさせていただきたく思います。

**里**：本日は貴重なお話をたくさんお聞きすることができました。徳島の経営者の皆さまに、各大学のご努力をお伝えする対談になったと思います。本当にありがとうございました。





### 理念

国立大学法人徳島大学は、自主と自律の精神に基づき、真理の探究と知の創造に努め、卓越した学術及び文化を継承し向上させ、世界に開かれた大学として、豊かで健全な未来社会の実現に貢献する。

### 産学連携・共同研究に関するお問い合わせ

研究・産学連携部 常三島研究・産学支援課 研究・産学支援係  
TEL：088-656-9861  
E-mail：sangaku@tokushima-u.ac.jp

### 求人／インターンシップに関するお問い合わせ

キャリア支援室  
FAX：088-656-7635 FAX：088-656-7636  
E-mail：gkseisyu@tokushima-u.ac.jp



### 建学の精神 「全人的自立」

知識・技術の修得とともに、人間的な成長を志し、社会に貢献できる実践的な力を確立する。

### 産学連携・共同研究に関するお問い合わせ

地域教育・連携センター（SUDAchi 推進室） 社会連携推進課  
TEL：088-665-9953  
E-mail：sudachisuishin@shikoku-u.ac.jp

### 求人／インターンシップに関するお問い合わせ

就職キャリア支援部 就職キャリア支援課  
TEL：088-665-9916  
E-mail：syushokuka@shikoku-u.ac.jp



徳島文理大学  
徳島文理大学短期大学部

### 建学の精神 「自立協同」

成長してゆく人間として、「自立」は重要な到達目的であり、「協同」は「自立」を具現化する方法である

### 産学連携・共同研究に関するお問い合わせ

徳島キャンパス地域連携センター  
TEL：088-602-8261  
E-mail：renkei@tks.bunri-u.ac.jp  
香川キャンパス地域連携センター  
TEL：087-899-7207  
E-mail：renkei@kgw.bunri-u.ac.jp

### 求人／インターンシップに関するお問い合わせ

徳島キャンパス 就職支援部  
TEL：088-602-8400  
E-mail：career@tks.bunri-u.ac.jp  
香川キャンパス 就職支援部  
TEL：087-899-7400  
E-mail：career@kgw.bunri-u.ac.jp



(2024年6月17日 ホテルクレメント徳島にて)  
(企画・構成 里正彦／ 編集 近藤有紀 瀧川めぐみ ／ 座談会当日撮影 工藤健志)